

書評 Book Review

Forests and Ecological History of Assam, 1826-2000,
by Arupjyoti Saikia. Delhi: Oxford University Press,
2011. p.388. ISBN978-0-19-806953-9

浅田晴久*

「アッサムは山地と丘陵に囲まれ、巨大な川が流れ、豊かな木々に恵まれた土地である」。イギリス植民地時代の19世紀に刊行された書物にはこのような記述がみられる。しかしインド北東部のアッサム州(以後、アッサム)で調査をしてきた評者には、この地域がかつて豊かな森林に覆われていたというのはにわかには信じがたい事実である。現在のアッサムを見渡すと平地はすみずみまで耕作され尽くされ、丘陵地も麓には人工的な茶園が広がっており、自然植生はきわめて限られているからである。かつて豊富に存在していたはずの森林が、なぜ今日のような状態にまで減少してしまったのかという問いが本書の主題である。

本書は、現在までのアッサムの森林変化の謎をめぐるポリティカルエコロジーについての研究であり、森林を軸に環境史の解明に挑んでいる稀有な歴史書でもある。日本でも近年、環境史研究の重要性が認識されるようになり学際的な分野の開拓を志向した専門書も出版されているが(たとえば水野 2006, 池谷編 2009, 宮本・野中編 2014 など)、日本以上にディシプリンの枠組みが強固なインドでも学際的な研究成果が現れてきたのは素直に歓迎すべき傾向である。400ページ近くある本書をレビューして日本国内で紹介しようと決意したのも、同じ地域で環境史を研究している同志によりやく出会えたという評者の個人的な喜びが動機となっている。

著者のSaikia氏はアッサム出身の歴史学者であるが、国内外のさまざまな研究機関に勤めた経歴を有し、その経験が本書の記述を厚みのある内容にしている。往々にしてインド地方大学の地理学や歴史学の研究者は、地域内に閉じこもってローカルな事象を論じがちであるが、著者は地元の図書館や政府機関の文書にアクセスしているだけでなく、コルカタ、ニューデリー、ロンドンの図書館でも精力的に文献調査を行っており、インド亜大陸、さらには旧イギリス植民地全体と

いう非常に広い視野からアッサムという地域を捉えているのが特徴である。また環境史研究のためには、たとえ人文科学分野からのアプローチといえども、一定水準以上の自然環境に関する知識と理解が求められる。本書では、地形や気候といった基礎的な情報にとどまらず、樹木の利用法や植生の遷移過程などの情報も多数記述されており、文理融合の環境史にふさわしい内容になっている。

本書は序章とそれに続く8つの章から構成されている。

序章では、本書の目的が明示されると同時に、本書に登場する様々なアクターが紹介される。主なものが、野生動物、植民地政府、森林官、商人、茶園主、農民である。19世紀までアッサムの森林は野生動物の棲む「ジャングル」であったが、20世紀以降は狩猟保護区として「フォレスト」に生まれ変わる。政府は植民地政策の一環としてアッサムの森林を資源としてみなすようになる。森林官は商人と結託してチークなどの有用材を植林していく。茶園造成はパッチ状で限定的ではあるが、アッサムの森林景観および自然と人間の関係を大きく変えてしまう。農民は政府による森林囲い込みと茶園拡大によりかつての資源利用の場を奪われ、疎外された存在になっていく。現在のアッサムの森林景観の形成にこれらすべてのアクターが関わってきたのである。

第1章「森林の地図化と想像化―重商主義から帝国森林管理へ」では、東インド会社が進出を開始した19世紀初頭を皮切りに、いかにしてアッサムの鬱蒼としたジャングルが秩序ある「フォレスト」に変わっていったかについて、支配者側の視点から記述される。英緬戦争後にアッサムがイギリスの支配下に入ったときには既に、当時需要が逼迫していた木材の供給地としての期待があった。19世紀半ばには、ベンガルでの造船用として、さらにインド帝国各地での鉄道敷設

* 奈良女子大学文学部

のために木材が運び出され、早くも資源の枯渇が危惧されるようになる。そこでイギリスの専門家たちは有用な森林資源を体系的に分類し、森林地域を地図化することで近代的な資源管理法を導入する。この際に役立ったのは同じイギリス領内のビルマやシッキムなどで既に培われた専門知識であったという。

第2章「保全、空間秩序、新たな景観」では、植民地政府がアッサムの森林資源を効率的に利用するために作り上げていった制度について記述される。木材需要の高まりを予想して、造船材や建築材、茶箱材として価値の高い樹木を保護するために保全林 (reserved forest) の指定が1870年代以降始まった。しかし周辺で焼畑を行っていた農民の事情を無視して強引に保全林を指定したために軋轢を生むことになる。そこでローカルな事情を考慮するために発明されたのが、保護林 (protected forest)、後の未分類州有林 (un-classed state forest) である。疎林地帯、耕作不適地、湿地などを州政府が独自にこのカテゴリーに指定することで、各方面の利害を調整しつつ、内部の森林資源から収益を上げることが可能になった。現在も住民と協働して森林管理する方法として共同森林管理 (Joint Forest Management) が実施されているが、商業化が進む一方で、必ずしも住民の権利が尊重されているとは言えない。

第3章「地域の森林—制度と組織」では、森林を支配するための法制度について述べられる。19世紀の森林管理制度は、植民地政府の森林政策の一環としての性格を強く帯びていたが、アッサムには焼畑を行う農民や面積を拡大しようとする茶園主、地税を徴収するザミンダールなど、地域固有の阻害要因が多数存在していた。そこで地域の課題に対処して効率よく森林管理を行うために、未分類州有林の指定を可能にした Assam Forest Regulation 1891 など、次々に法整備が進められた。ときには農民団体に譲歩して、森林の利用権を認めることも必要であった。現在のアッサムでは持続的な材木生産と土壌侵食や洪水防止など森林の生態機能の保全が政策の中心となっている。

第4章「アッサムの森林—商人の取引から帝国経済へ」では、アッサムの森林がどのようにして市場に取り込まれるようになったかが述べられる。アッサムの森林資源の価値にいち早く気づいた州森林局は、すぐに州内の森林の価値を査定し、サラノキやチークなどのメジャー産物とそれ以外のマイナー産物に分類した。植民地時代はメジャー産物の商品化が優先して進められたが、ネックとなったのは奥深い森林へのアクセスの問題である。鉄道敷設と蒸気船の運航開始によ

りハードルは下げられたが、木材供給が安定するまでには時間を要した。木材資源からの収益を補うかたちで徐々に取引が増えてきたのが、ゴム、竹、わらなどのマイナー産物であった。森林局の支配域が拡大するにつれて、取引額も増加していったが、これらの資源に頼って生活していた住民を排除する結果になった。印パ分離独立後は市場の一部とそれまでの輸送経路を失ったこともあり、新たに民間資本による製紙業も登場して、森林産業の多様化が進んでいる。

第5章「森林の科学—保全の再考」では、アッサムの森林官が科学の力を利用して森林管理を成し遂げた経緯について説明される。彼らにとって科学とは見向きもされなかった樹木に商品価値を生み出し、森林景観を変容させてしまう道具であった。帝国政府がデラドゥーンに設立した森林研究所と、各地方の森林官の交流により、20世紀までに基本的な知識と実践法が確立された。科学的な植林法の導入によりチークをはじめ、ゴム、マツ、マホガニーなどの植林が進んだが、ネックとなったのが労働力の不足であった。そこで農民の力を借りて植林を進めようと20世紀初頭に始まったのが、既にビルマで成功していたタウンヤ法である。焼畑と植林を両立させるこの方法を取り入れることで、農民との対立を回避し、労働コストを抑えることに成功する。しかし森林官の怠慢および森林労働を厭う農民の志向の結果、独立後はタウンヤ法が衰退してしまうことになった。

第6章「狩猟から野生動物保護へ—保護の見直し」では、アッサムの野生動物が狩猟の対象から、保護の対象へと変化していく過程が描かれる。東インド会社の支配体制下に入った19世紀の森林では、ヨーロッパ人の役人や茶園主が余暇に狩猟を楽しんでいた。アッサムには軍用に利用されるゾウや、珍しい一角サイが多数生息していたが、商人の密猟により19世紀末までに個体数が激減してしまう。そこで森林局は野生動物が棲む森林へのアクセスに制限をかけ、動物の牙や角を森林産物に指定することで保護に乗り出すことになった。独立以降も個体数調査や生態調査などに基づく科学的な保護法が導入され、現在まで一角サイはアッサムのシンボルとなり続けている。

第7章「生業活動と森林保全の力学」では、森林をめぐる農民と政府の対立が社会問題化していく過程が述べられる。森林局の管理が強まるにつれて、それまで地元農民が森林内で行っていた放牧や薪収集などは違反行為とみなされるようになり、農民の不満が高まっていく。さらには税収局主導の下、19世紀末の時点ですでに過密状態にあった東ベンガルから農民を

移住させて、ブラマブトラ川沿いの荒蕪地でジュート栽培を行う計画が始まった。本来この土地で放牧を行ったり、資源を入手したりしていた地元農民は行き場を失うことになる。独立後も洪水や河岸浸食で土地を失った農民の数は激増し、農民団体が各地に組織されて政府に嘆願が寄せられるようになる。この動きを政治家たちが巧みに利用し、政府も圧倒的な圧力に押される形で森林内へのアクセスを認めてしまった結果、アッサムの豊かな森林が決定的に失われることになったのである

第8章「政治化する森林」では、他地域の状況も踏まえて、アッサムの森林をめぐる歴史的経緯と現状がまとめられる。アッサムの森林支配はイギリス帝国の森林政策に沿う形で東南アジアや南アジア同様に進められたが、地域固有の問題に対処する必要があった。地域特有のサバンナ平原の存在は、単一樹種の育成にとどまらない複雑な森林政策を必要とし、この空間に農民が進出して耕地拡大を目指すきっかけの場にもなった。茶園の成立も地域の森林政策に大きな影響を及ぼした。過去200年間で森林景観はすっかり変容してしまっただけで、将来の展望も決して明るくはない。現在も人口増加は止まらず、耕地の需要が高まっているからである。政府が主導する開発プロジェクトや小規模茶園プロジェクトも新たな脅威となっている。アッサムの森林は政治家と産業界の利権が絡む問題になっており、農民の抗議運動の結末も不透明のようである。

以上のように、本書ではアッサムの森林変遷に関してさまざまな角度から検討が行われているだけでなく、地域社会の発展過程に関しても包括的な歴史が記述されており、アッサム地域に関心のある研究者にとっては必読書であると言える。その上で、あえて本書に注文をつけてみたい。まず1つ目は、アッサムの環境史を一目で理解するためにも年表をつけてほしかったという点である。本書では章が変わるごとに同じ事象が何度も繰り返し出現するために、自分で重要事項をメモしながらでないと、読み進めていくことは

困難である。環境関連の重要な法律の制定年や、その後の地域社会に大きな影響を与えた事象の発生時期などをまとめた年表があれば、本地域の歴史を簡潔に知りたい初学者にとって有用であったであろう。そして2つ目は、歴史学分野の著作物とはいえ、やはり地図を掲載してほしい点である。第1章には地元大学の地理学者が作成に協力した19世紀の森林被覆図が2点掲載されているが、それだけではローカルな地名が頻出する以後の章の地域を概観するには圧倒的に物足りないものがある。地理学者と歴史学者では地域認識の方法がかなり異なるようであるが、それを考慮しても本地域になじみのない読者にとっては不親切であると言えるであろう。この点は逆に考えると地理学の方面からこの分野に貢献できる余地が大いに残されているということでもあり、学際的な環境史を研究するにあたり異分野の研究者との協働が必要になることを改めて痛感させられる。本書の結末はやや中途半端な書き方で終わっているが、森林地利用をめぐる農民の抗議運動は現在もアッサム各地で進行中であり、著者の続刊でも詳しく書かれている(Saikia 2014)。本書で明らかにされた歴史的な森林荒廃だけでなく、洪水や気候変動などの環境問題は21世紀になって、ますます重要度が高まってきており、今後も広い視野に立った良質な環境史研究の蓄積が望まれる。

【文献】

- 池谷和信編 (2009)：『地球環境史からの問いーヒトと自然の共生とは何か』岩波書店。
 水野祥子 (2006)：『イギリス帝国からみる環境史ーインド支配と森林保護ー』岩波書店。
 宮本真二・野中健一編 (2014)：『ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 第1巻 自然と人間の環境史』海青社。
 Saikia, A. (2014): *A century of protests; Peasant politics in Assam since 1900*. Routledge, India.

(2014年11月6日受付)

(2015年1月23日受理)